

コ メ ン ト 2

——「帝国」の断絶と持続——

川 瀬 貴 也*

植民地帝国日本の学的営為については、これまでも研究蓄積がある。総合的なものとしては『岩波講座「帝国」日本と学知』[2006]はその代表的な成果であるし、文化人類学においては坂野徹[2005]が、そして私自身も植民地朝鮮における宗教研究に対して研究を進めてきた[川瀬貴也2009]。私の研究を含め、その当時の学問の「オリエンタリズム性」を指摘するのは一種の「常識」「作法」ともなり、もはやある意味安易な問題提起となったかも知れない。殊に「宗教」をめぐる学的営為に関して言えば、統治方策に資するための「原住民」の調査の一環であったことは言うまでもなく（実際に役に立ったかどうかはさておき）、また原住民の「宗教」もしくは「民間信仰」「呪術」「迷信」を調べ、分類すること自体が、帝国内の宗教の価値的な序列化に寄与していたことも容易に推測できよう。「民俗信仰」研究、もしくは「民俗学」的研究も、柳田国男が帝国領域に視野を拡げる「比較民俗学」は時期尚早として躊躇したというエピソードにも見られるように[川村湊1996:5-13]、あからさまな帝国の秩序に仕えることを表面上拒否する素振りを見せながらも、その実、日本と周辺民族の「古層」を訪ね共通項を見出す姿勢が陰から帝国秩序に「奉仕」してきたとは言えないだろうか。例えば日鮮同祖論などは分かりやすい事例として挙げられるだろうが、崔吉城は朝鮮統治の場合は、異文化であるという意識が希薄だったので、「民族学」よりは「民俗学」的な手法で調査したのではないかと示唆している[崔吉城2000:171-178]。

サイードの『オリエンタリズム』以降、今我々が継承している学問体系そのものが帝国の「遺産」であることは明らかにされており、「民間信仰」そのものも「民間信仰研究」も当然ポストコロニアルな視点なしで語ることはできまい。ポストコロニアル研究において常に中心的な課題である「断絶と持続」というテーマは、信仰実態そのものに対しても、その対象をまなざす我々自身の姿勢へも問われるべき問題であろう。今回の研究会「帝国日本と民間信仰」もそのような意図で開催されたと私は了解しているが、以下では個々の発表に対して当日私が述

* かわせ たかや 京都府立大学文学部

べた質問を録音を元にまとめて、いくつかの問題提起を記していく。

まず角南聡一郎報告に対して私は、「火葬」と「墓（墓石）の小型化」「集団墓地化」という、台湾と朝鮮で共に総督府によって主導された「墓制の近代化政策」の共通点を挙げ、角南氏がこれまでも指摘してきたように〔角南 2006〕、台湾において日本型の墓石が継承され、残されたというのはどのような意味を持つのか、と質問した。また、これらは「日本的」なものとして台湾に残ったと言うよりは、「合理的」且つ「近代的」なものとして残ったのではないかと指摘した。ちなみに韓国においては、墓制における日本帝国主義の痕跡を消すべく、解放後もいわゆる「土まんじゅう」が作られたのは周知の通りである。とはいえ、近年の韓国は火葬が行政の指導もあり急激に進行し、寺院にも永代供養のシステムが存在すると仄聞するが、植民地期の「起源」さえ忘却された現況の hybridity は台湾と韓国の共通点ではなからうか。

林承緯報告は、台湾に今も残る日本人の宗教施設のうち、神社が新たな意味付与をされ、祭りが行われている事例を紹介したものであった。これは角南報告の墓石の残存/利用とも通じる話であるが、つまり残された宗教的遺物をブリコラージュ的に組み合わせて、新たな「伝統」を作り上げた事例とも言い換えられよう。林氏は台湾に残された日本人の民俗信仰的な遺物の調査を行っているが〔林 2012〕、鳥居のような日本特有の施設を「再利用」することに対する台湾人の反応はいかなるものなのか、ということは気になる、その点について質問をした。これは言い換えれば、「帝国の記憶」「植民地体験」が肯定され、利用及び再編集がなされた、ということと、現地の宗教性との接合のあり方への問いである。

韓国においてもいわゆる「植民地神社」は多数作られ、ほとんどが破壊されて現在に至っているが〔中島三千男 2013〕〔神奈川大学非文字資料研究センター 2014〕、まず、宗教施設としての再利用は、寡聞にして聞いた事がない。ごく少数だが、石段などが再利用されている例は、韓国江原道春川市の旧江原神社跡などが挙げられるが（写真参照）、これは単に階段という「モノ」を継承しているだけで、宗教的な痕跡は消されている。



（旧江原神社跡地。現春川世宗ホテル。2014 年 8 月筆者撮影）

森田真也報告に対しては、まず、石垣島の台湾系移民の置かれた状況を、沖縄本島における「離島」出身者とアナログカルに捉え（共に重層的な差別の下位に置かれた、という点で類比できる）、石垣島の状況の独自性はどのようなものであるのかを質問した。また戦前に移住した台湾人と、戦後に移住した台湾人の違いはどのようなものかについても質問した。続いて、日本人と台湾人が結婚した際は、伝統的宗教行事・儀礼がいかに継承されるか、もしくはされなくなるのかについて質問した。特に「帰化」した場合、中国的伝統はいかに継承されるのか（もしくはされないのか）、というのは興味深い。

宮下良子報告には、在日コリアン寺院の「トランスナショナル性」と「インターナショナル性」の違いを質問した。つまり、国境を越えて宗教者が「本国」からやってくることは確かにトランスナショナルだが、クライアントは在日コリアン（とその家族）にほぼ限定されており、渡航先の日本社会一般に広めようとするような志向性があまりない、つまり「インターナショナル」な側面が弱いのではないか、という指摘である。また、日本化されざる儀礼がこれほど残っている事例というのは、他のエスニック・グループの宗教儀礼ではあるのか、という素朴な疑問も湧いてくる。在日コリアンの家庭において、祭祀（チェサ）の保持が日本社会への構造的同化を回避するのに重要な役割を果たした、という議論もあるが[梁愛舜 2004: 158]、その延長として、在日コリアンの友人や家族となった日本人クライアントが相手の場合は、どのような変容が見られるのか、という点が気になった。宮下氏はかつて日本人クライアントを獲得していく在日コリアンのシャーマンの宗教的変容についての研究を既に発表しているので[宮下 2005]、私の当日の質問は少し的外れであったことは否めないが、ニューカマーが増えたことによる変化や、二世、三世への継承での変容の行方は今後も「帝国日本と民間信仰」の問題系であり続けるだろう。

参考文献

- 神奈川大学非文字資料研究センター 2014 『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』神奈川大学日本常民文化研究所
- 川瀬貴也 2009 『植民地朝鮮の宗教と学知——帝国日本の眼差しの構築』青弓社
- 川村湊 1996 『「大東亜民俗学」の虚実』講談社
- 坂野徹 2005 『帝国日本と人類学者 一八八四—一九五二』勁草書房
- 角南聡一郎 2006 「戦後台湾における所謂塔式墓の系譜とその認識——無意識の中の「日本」のかたち」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における〈日本〉——植民地経験の連続・変貌・利用』風響社
- 崔吉城 2000 「日帝植民地時代と朝鮮民俗学」中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社
- 中島三千男 2013 『海外神社跡地の景観変容』御茶の水書房
- 宮下良子 2005 「越境するシャーマニズム——在日コリアン一世女性の事例分析から」『韓国朝鮮

の文化と社会』4号 風響社

山本武利ほか編 2006 『岩波講座「帝国」日本と学知（全8巻）』岩波書店

梁愛舜 2004 『在日朝鮮人社会における祭祀儀礼——チェーサの社会学的分析』晃洋書房

林承緯 2012 『宗教造形與民族傳承：日治時期在臺日人的庶民信仰生活』藝術家 台北